

愛知県内で対策が必要な移入種

ここでは、特に自然環境などへの影響があり、対策の必要性が高い代表的な移入種を30種ピックアップして解説します。

【ページの見方】

種の解説

移入種の名称

種の概要

目、科、学名

分類群 (1)

法令などによる選定状況 (2)

県内の確認状況

識別ポイントなど

オオクチバス

「ブラックバス」の呼び名で有名です。池や川で、他の魚などさまざまな動物を食べるため、非常に深刻な影響を与えています。

原産地
北アメリカ。

形態と生態
成長すると、全長30~50cmの大きさになる。岸边などの水深の浅い場所に巣（産卵床）をつくり、雄親が卵や子どもを外敵から守り、育てる習性がある。

移入経路と現状
食用や釣り魚とすることなどを目的として、神奈川県芦ノ湖に持ち込まれた。一般的な呼び方である「ブラックバス」の名称は、オオクチバスや同属のコクチバスなど数種の総称。現在では日本各地に広がり、愛知県内でも、広い範囲で生息が確認されている。主に湖や池などに生息し、河川では下流の淀みなど流れの緩やかな場所によく見られる。海水と淡水が混ざる汽水域でも生息が確認されている。

影響
他の魚類をはじめ、エビ類や水生昆虫などさまざまな動物を食べるほか、トンボなどの陸上昆虫や鳥の雛、ネズミの仲間を捕食する例もある。オオクチバスの侵入後、在来種の種数や個体数が減ってしまった池や湖もあり、在来生態系への影響が非常に大きい。

類似種との識別点
コクチバス（特定外来生物）は、口が小さく、目の位置の直下まで止まっている。

対策
人工的な産卵床の設置や池干しによる駆除が行われている（③移入種対策事例を参照）。そのほか、網や釣りによる捕獲や、湖の水位調整による対策なども行われている。

スズキ目サンフィッシュ科
学名: *Micropterus salmoides*

選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

県内の確認状況

県内を17のブロックに区分し、区域内で確認記録があればグレーに着色

全長30cmを超える個体

全長30cmを超える個体

識別ポイント:
口の大きさが違う

オオクチバスとコクチバスの違い

(東京都島しょ農林水産総合センターHPより)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

1 分類群



哺乳類



鳥類



は虫類



魚類



昆虫類



クモ類



貝類



甲殻類



植物

2 法令などによる選定状況（73、75ページ参照）



【掲載種一覧】

分類群	種名	選定状況					掲載 ページ
		条例 公表種	特定 外来 生物	要 注意 外来 生物	日本 ワースト 100	世界 ワースト 100	
哺乳類	アライグマ		○		○		15
	ヌートリア		○		○	○	16
	ハクビシン	○					17
鳥類	コブハクチョウ	○					18
は虫類	ミシシippアカミミガメ	※3		※3	○	○	19
魚類	オオクチバス		○		○	○	21
	コイ					○	22
	ブルーギル		○		○		23
昆虫類	アルゼンチンアリ		○		○	○	24
	クワガタムシ科	○		○			25
	タイワンタケクマバチ	○					27
クモ類	セアカゴケグモ		○		○		28
貝類	カワヒバリガイ		※4		○		29
	スクミリンゴガイ	○		○	○	○	30
甲殻類	アメリカザリガニ			○	○		31
植物	アツバキミガヨラン	○					32
	アレチウリ		○		○		33
	ウチワサボテン属	○		※5		※5	34
	オオカナダモ			○	○		35
	オオキンケイギク		○		○		36
	キショウブ	○		○	○		37
	スイレン属	○					38
	タカネマツムシソウ	○					39
	トウネズミモチ	○		○			40
	ノハカタカラクサ	○		○			41
	ハゴロモモ	○		○			42
	ハリエンジュ			○	○		43
	ポンポンアザミ	○					44
	ヒガタアシ	○					45
	モウソウチク	○					47

3 「アカミミガメ」として選定されています。

4 カワヒバリガイ属の全種として指定されています。

5 ウチワサボテン属の1種「センニンサボテン (*Opuntia stricta*)」が選定されています。

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

アライグマ

ペットとして人気でしたが、在来小動物を食べるほか、農作物被害や建造物への侵入が問題となっています。しま模様のしっぽが特徴です。

■ 原産地

北アメリカ東部。

■ 形態と生態

食べ物を手で洗う動作をすることからこの名がついた。成獣の体重は5～12kg、頭から胴までの長さは45～65cm、尾の長さは20～40cm。体色は灰色から明るい茶褐色で、白地に黒のアイマスクをつけた様な顔としま模様の尾が特徴的である。

水辺の森林などに生息するほか、都市部にも進出している。雑食性で果実や野菜、穀類、小哺乳類、鳥、魚、カエルなどを捕食する。

■ 移入経路と現状

ペットとして、あるいは動物園などの人気者として広く飼育されてきた。全国各地で野生化しているが、いずれも飼育個体が捨てられたか、逃亡が原因とされている。愛知県内でも広い範囲で確認されている。

■ 影響

さまざまな在来小動物を食べるため、地域の生態系に影響を及ぼすおそれがある。このほか、農作物などを食い荒らしたり、民家の屋根裏などにすみつき、建造物を傷つけるなどの被害も出ている。

■ 類似種との識別点

タヌキに似ているが、アライグマには尾にしま模様があることで区別できる。タヌキの顔には白い部分がない。

■ 対策

かごワナなどを使った捕獲駆除が行われている（[3](#)移入種対策事例を参照）。

ネコ目アライグマ科

学名：*Procyon lotor*

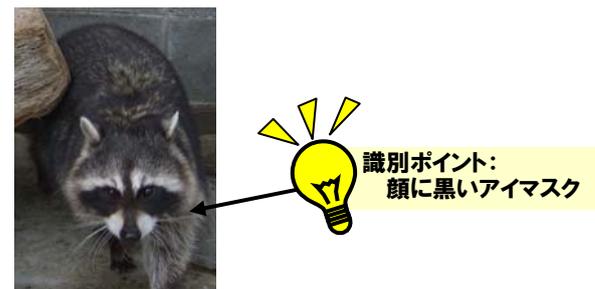


哺乳類

■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

■ 県内の確認状況



ヌートリア

水辺に生息する大型のネズミの仲間。後ろ足に水かきがあり、泳ぐのが上手です。水生植物などを食べ、水稻などへの被害も深刻です。

■ 原産地

南アメリカ。

■ 形態と生態

頭から胴までの長さは50～70cm、尾の長さは35～50cm、体重6～9kg。体形はビーバーに似ているが、長い尾がネズミのようである。体色は茶褐色。後ろ足に水かきが発達し、泳ぐのが得意なことから、「沼ビーバー（swamp beaver）」という英名がついている。

流れが緩やかな河川や湖沼に生息し、ため池の土手や河川の堤防などに巣穴を掘って生息する。夜行性だが、昼間に行動することもある。雑食性で、マコモ、ヨシ、ヒシ、ウキクサなどの水生植物を大量に採食し、ドブガイなどの貝類も捕食する。

■ 移入経路と現状

1939年頃、軍服の毛皮用、食用として導入された。戦時中は西日本を中心に各地で飼育されたが、終戦と同時に飼育個体は野外に捨てられた。現在は、西日本を中心に生息しており、愛知県内でも西三河、尾張地方で生息が確認されている。

■ 影響

農業被害としては、水稻のほか、夏期には瓜類、芋類、根菜類、葉菜類、豆類などが、冬期には葉菜類、根菜類が認められている。巣穴を掘ることで水田の水が抜けたり、堤防の強度が下がるなどの問題もある。

■ 類似種との識別点

東京都、千葉県、埼玉県に生息するマスカラットは、ヌートリアよりも小型で、尾は縦に扁平、後ろ足には水かきはない。

ネズミ目ヌートリア科

学名：*Myocastor coypus*



哺乳類

■ 選定状況



■ 県内の確認状況



■ 対策

駆除としては、田畑への侵入ルートに箱ワナを仕掛けて捕獲する方法が有効である。このほか、田畑の周囲に侵入防止のフェンスを張り巡らせたり、巣穴周辺の草刈りなども行われている。

繁殖力が強いため、一定期間捕獲を中断すると個体数がすぐに回復してしまう。継続した捕獲により個体数をコントロールする必要がある。

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ハクビシン

額から鼻先にかけて白いすじがあり、「ハクビシン」(白鼻心)と名づけられました。木登りが得意で、果樹などに被害を与えます。

■ 原産地

東南アジア、中国、台湾。

■ 形態と生態

雄は頭から胴までの長さが約65cm、尾の長さは約40~60cm、体重2~5kg。雌は雄よりひとまわり小さい。

樹上生活が得意で、夜行性である。生息域は市街地から山間部までと広く、人の生活圏と重なっている。雑食性で果実を好み、昆虫類や両生類、は虫類も食べる。住宅地では、生ごみなどもエサにしている。

■ 移入経路と現状

第二次世界大戦中には毛皮用として飼育されていたが、毛皮の質が悪いため野外に放され、戦後になって個体数が増えたといわれている。

現在は本州のほぼ全域、四国、九州の一部に生息している。定着域では、同様に雑食性で人里近くに生息するタヌキと競合のおそれがある。愛知県内でも、広い範囲で生息が確認されている。

■ 影響

果樹などの農業被害が問題となるほか、近年では民家の屋根裏への侵入による騒音や糞害が問題となっている。

■ 類似種との識別点

テン、タヌキ、アナグマなどと生息場所が重なるが、長い尾と白い鼻すじの有無で区別ができる。

■ 対策

オリによる捕獲が行われている。アライグマなどの他の動物を対象とした捕獲用のオリに入ることもある。

ネコ目ジャコウネコ科

学名: *Paguma larvata*



哺乳類

■ 選定状況

条例公表

特定外来

要注意

日本ワースト100

世界ワースト100

■ 県内の確認状況



アライグマ捕獲用のオリに入った個体
(写真提供: 京都府亀岡市)

コブハクチョウ

ハクチョウの仲間ですが、実は移入種です。他の水鳥への悪影響のほか、農業被害のおそれもあります。安易なエサやりはやめましょう。

■ 原産地

ヨーロッパ中西部、中央アジア、モンゴル、シベリア南部。

■ 形態と生態

全長約 150cm。全身白色の羽毛で、くちばしはオレンジ色。くちばしの付け根に黒色のコブがある。若鳥は灰褐色。

産卵期は 4～5 月。巣は岸辺の草むらの地上に作り、1 回に 4～7 個の卵を産む。原産地では、冬に南へ渡る。主に水草を食べる。

■ 移入経路と現状

国内で野生化したもので、北海道ウトナイ湖を繁殖地、茨城県霞ヶ浦を越冬地としているものがある。このほか、関東地方から中国地方でも生息が確認されている。愛知県内では、名古屋市や岡崎市などで確認されている。

■ 影響

体が大きいので、エサや生息場所をめぐって在来の鳥類との競合が考えられるほか、生息数が増えると、レンコンなどの水生の作物や在来植物に悪影響を与えるおそれもある。

■ 類似種との識別点

愛知県内へ冬季に飛来することのあるコハクチョウは、コブハクチョウよりも小さく、くちばしの付け根に黒いコブがない。

■ 対策

飼育個体は飛べないようにした上で放し飼いにされることが多いが、繁殖した場合、雛を飛べないように処置する必要がある。

また、野生化した個体に餌付けしないことが必要である。

カモ目カモ科

学名 : *Cygnus olor*



鳥類

■ 選定状況

条 例 公 表	特 定 外 来	要 注 意	日 本 ワ ー ス ト 1 0 0	世 界 ワ ー ス ト 1 0 0
------------------	------------------	-------------	---	---

■ 県内の確認状況



参考 : コハクチョウはコブがない

(写真提供 : 杉山時雄氏)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ミシシippアカミミガメ

5cm ほどの子ガメが、「ミドリガメ」として売られています。在来のカメやその他の水生動物などに大きな影響を与えます。

■ 原産地

アメリカ合衆国から南アメリカ北西部。

■ 形態と生態

甲羅の長さが雄は 20cm、雌は 28cm、体重は 2.5kg 程度で、雄より雌のほうが大型になる。目の後方に帯状の赤い斑があるので、アカミミガメという名がついた。子ガメの甲羅は黄色または黄緑色で、赤や黄の斑紋がある。成長すると甲羅は暗い緑色になり、頭部の赤い斑も不明瞭になる。

魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生植物などの生体・死骸を問わず食べる。陸上の植物の葉、花、果実なども食べる。頑健で汚染にも強く、都市部のきわめて汚れた河川でも生息できる。昼行性で日光浴を好む。

繁殖力は旺盛で、年に 3~5 回産卵し、一度に 2~22 個の卵を水辺の地中に掘った穴に産む。

■ 移入経路と現状

1950 年代後半にペットとして輸入され、以来「ミドリガメ」の名称で販売されている。簡単に入手でき、小さいうちは飼育が容易であるが、長生きする上に、成長すると攻撃的になることがあるため、捨てられることが多い。特に 1975 年には、人へのサルモネラ菌の感染例が報道されたことから、多くの個体が捨てられた。

現在では、日本各地で定着が進んでおり、すでに国内で最も普通に見られるカメとなっている。県内でも、平野部を中心に広い範囲で生息が確認されている。

カメ目ヌマガメ科

学名：*Trachemys scripta elegans*



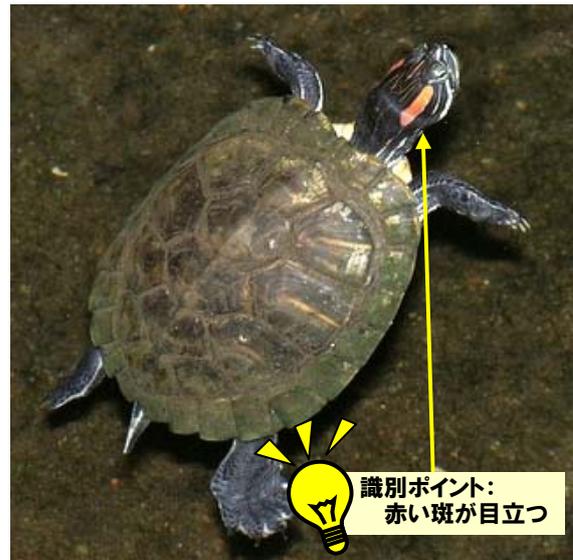
は虫類

■ 選定状況



アカミミガメとして条例公表種、要注意外来生物に選定されている。

■ 県内の確認状況



識別ポイント：
赤い斑が目立つ

(写真提供：菅原隆博氏)

■ 影響

河川や池に高い密度で生息し、在来のカメとエサや日光浴の場所などが重なっている。このため、ミシシippアカミミガメがいる場所では、在来のカメや植物、魚類、両生類、甲殻類など、さまざまな生物に大きな影響を及ぼしている。

■ 類似種との識別点

クサガメは甲羅が茶褐色で、頭部と側頭部に黄色い断続的なストライプや斑紋がある。甲羅の表面には3本の目立つすじ（隆起線、キールという）がある。

ニホンイシガメは、甲羅の形が扁平で色は黄土色、もしくは茶褐色。甲羅の後縁がギザギザになっている。

ミシシippアカミミガメの大きな雄は、体全体の色が黒くなり模様が消えることがあるため、種の確認には注意が必要である。

■ 対策

県内では、各地で駆除が行われているほか、愛知学泉大学による調査研究が行われている（[3](#)移入種対策事例を参照）。

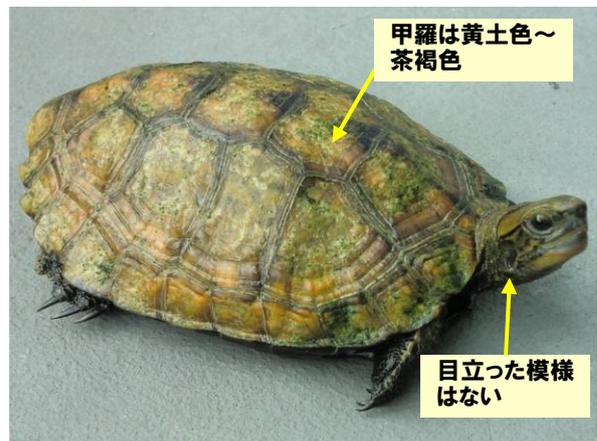
ペットとして子ガメが販売されているが、購入するのであれば、長生きし、大きくなること、大型になるときれいな色が失われて気が荒くなることを十分に理解して、最後まで責任を持って飼育するべきである。



ふ化後間もない稚ガメ
（撮影協力：愛知学泉大学）



クサガメ



ニホンイシガメ



大小のアカミミガメ
上：0歳、下：15歳超の成体
（撮影協力：愛知学泉大学）

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

オオクチバス

「ブラックバス」の呼び名で有名です。池や川で、他の魚などさまざまな動物を食べるため、非常に深刻な影響を与えています。

■ 原産地

北アメリカ。

■ 形態と生態

成長すると、全長 30～50cm の大きさになる。岸边などの水深の浅い場所に巣（産卵床）をつくり、雄親が卵や子どもを外敵から守り、育てる習性がある。

■ 移入経路と現状

食用や釣り魚とすることなどを目的として、神奈川県芦ノ湖に持ち込まれた。一般的な呼び方である「ブラックバス」の名称は、オオクチバスや同属のコクチバスなど数種の総称。

現在では日本各地に広がり、愛知県内でも、広い範囲で生息が確認されている。主に湖や池などに生息し、河川では下流の淀みなど流れの緩やかな場所によく見られる。海水と淡水が混ざる汽水域でも生息が確認されている。

■ 影響

他の魚類をはじめ、エビ類や水生昆虫などさまざまな動物を食べるほか、トンボなどの陸上昆虫や鳥の雛、ネズミの仲間を捕食する例もある。オオクチバスの侵入後、在来種の種数や個体数が減ってしまった池や湖もあり、在来生態系への影響が非常に大きい。

■ 類似種との識別点

コクチバス（特定外来生物）は、口が小さく、目の位置の直下までで止まっている。

■ 対策

人工的な産卵床の設置や池干しによる駆除が行われている（[3](#)移入種対策事例を参照）。そのほか、網や釣りによる捕獲や、湖の水位調整による対策なども行われている。

スズキ目サンフィッシュ科

学名：*Micropterus salmoides*

魚類

■ 選定状況

条例
公表

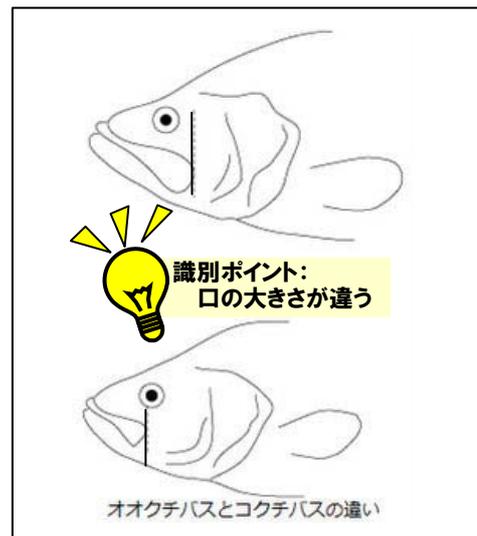
特定
外来

要
注意

日本
ワースト
100

世界
ワースト
100

■ 県内の確認状況



オオクチバスとコクチバスの違い

（東京都島しょ農林水産総合センターHP より）

コイ

身近なところで見かけるコイは、何でも食べる大食漢です。安易な放流やエサやりはやめましょう。

■ 原産地

アジア、ヨーロッパ全域。

■ 形態と生態

成長すると、全長 60cm 以上になる。春から初夏にかけて、川の水草が茂る場所で雌が水草に卵を産みつける。雑食性で水草や貝類、水生昆虫などを食べる。

■ 移入経路と現状

古くから釣り魚や食用として養殖されたものが、放流などにより河川などに定着した。放流されたり池から逃げ出したりして、ニシキゴイなどの飼育品種も定着している。県内の広い範囲で生息が確認されている。遺伝的に在来と認められるコイは、琵琶湖などの限られた範囲で確認されているだけである。

■ 影響

水質や水温への適応力が高く、大きくなるため天敵も少ない。口に入るものは何でも食べるほどの貪欲さから、水草、昆虫類、魚類、貝類などのさまざまな在来種を食べつくしてしまうおそれがある。

■ 類似種との識別点

飼育されたり養殖されてきた系統の個体は体高が高いが、在来のコイは体高が低くスマートな体つきである。ニゴイ（似ゴイ）、フナ類とは、口元に口ひげが2対（4本）あることで識別できる（右図）。

■ 対策

県内では、池干しなどの際に、他の移入種と一緒に駆除されている事例がある。個体数を増やさないため、川や池にいるコイにエサをやらないことが重要である。

コイ目コイ科

学名：*Cyprinus carpio*



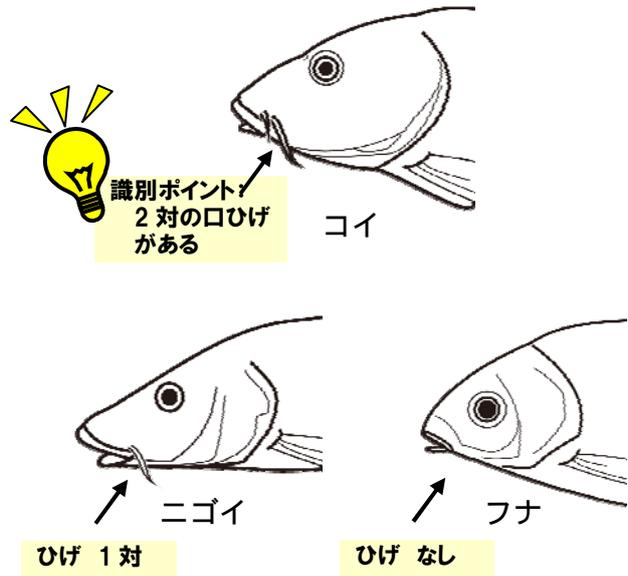
■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

■ 県内の確認状況



群泳するコイ



哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ブルーギル

各地の水域で大繁殖し、さまざまな動物を食べてしまいます。オオクチバスとともに、密放流による分布拡大が大きな問題になっています。

■ 原産地

北アメリカ東部。

■ 形態と生態

体長 25cm 程度に達する淡水魚。えらぶたの縁から突き出している部分が紺色であることから、「bluegill (青いえら)」と名づけられた。河川の下流域や湖沼、池などの止水域に生息する。1回の産卵で約2~3万個の卵を産む。

■ 移入経路と現状

日本への移入は、1960年が最初とされている。その後は、釣り用に意図的に放流され、現在ではほぼ全国に分布している。愛知県内では1970年代後半から矢作川水系で見られるようになり、現在は広い範囲で確認されている。

■ 影響

魚類や水生昆虫、水草などをエサとし、いろいろなものを食べる。特に、他の魚類の卵を好んで食べると言われている。卵や仔魚を雄が保護するため繁殖力は強く、短期的に個体数を増やすことができる。爆発的に数を増やすことから、生態系への影響が大きい。

■ 類似種との識別点

えらぶたが紺色である点はオヤニラミの特徴と似ているが、オヤニラミは上唇から額が白いこと、目が赤いことなどから識別できる。

■ 対策

オオクチバスと同様に、人工的な産卵床の設置や池干しによる駆除が行われている(3)移入種対策事例を参照)ほか、網や釣りによる捕獲や、湖の水位調整により卵を干上がらせることなども行われている。

スズキ目サンフィッシュ科

学名: *Lepomis macrochirus*

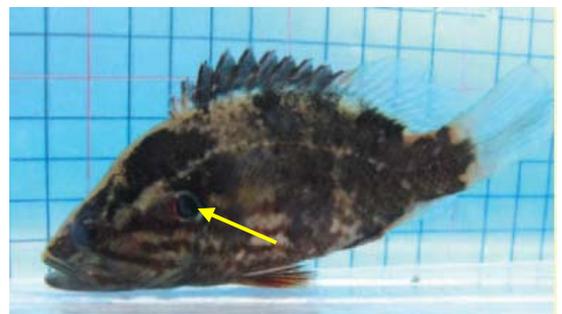
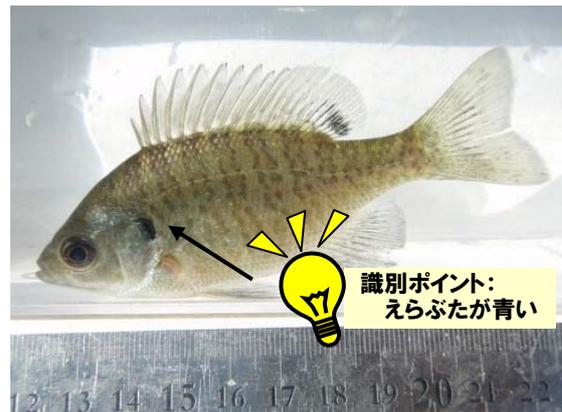


魚類

■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

■ 県内の確認状況



参考: オヤニラミ (条例公表種)
えらぶたの特徴がブルーギルと似ているが
体色が異なる

アルゼンチンアリ

太い行列をつくって非常に早く歩く小さなアリです。一度侵入すると、在来のアリが全滅するほどの影響があります。

■ 原産地

南アメリカ中部。

■ 形態と生態

体長 2.5mm 程度の小さな褐色のアリ。足と触角が長いのが特徴である。

市街地や公園などの開けた環境に生息し、石やプランターの下、石垣やコンクリート壁のひび割れの隙間などに巣をつくる。ひとつの巣には、多数の女王アリがいる。

■ 移入経路と現状

日本へは輸入された木材などに付着して侵入したと考えられている。愛知県内では、田原市と豊橋市の一部に生息している。

■ 影響

競争力が強く、本種が侵入すると在来のアリ類はほぼ全滅状態となるため、生態系への影響が大きい。屋内にも侵入して不快害虫となるほか、わずかな隙間に営巣して、電化製品の故障の原因となる可能性もある。農耕地に侵入した場合は、農業害虫であるアブラムシやカイガラムシを保護して、間接的に農作物に影響を与える可能性がある。

■ 類似種との識別点

体がスマートで足や触角が長いことが特徴であるが、似た在来種もいる。動きが速く、4列以上の太い行列をつくることも特徴である。

■ 対策

田原市では、アルゼンチンアリ防除事業が行われている（[3](#)移入種対策事例を参照）。

駆除は、アリ駆除用の殺虫剤で巣ごと退治する方法が有効である。繁殖力が強く、複数の巣が周辺に存在することが多いため、広範囲で一斉に駆除する必要がある。

ハチ目アリ科

学名：*Linepithema humile*



昆虫類

■ 選定状況

条例公表

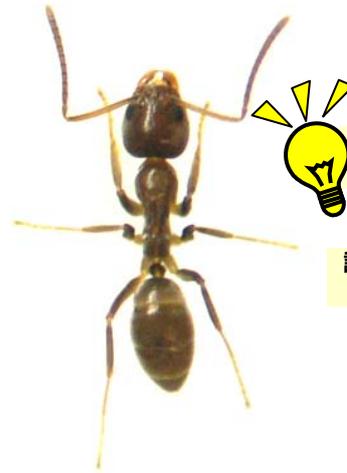
特定外来

要注意

日本ファースト 100

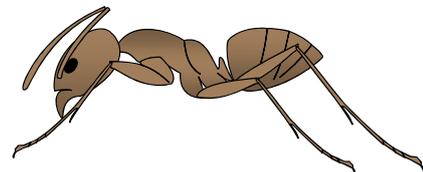
世界ファースト 100

■ 県内の確認状況



識別ポイント：
足と触角が長い

識別ポイント：
歩くのが早い



横から見たイラスト

また、駐車中の自動車内に侵入し営巣した例があるように、交通機関により移動定着する可能性もあり、分布拡大への注意が必要である。

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

クワガタムシ科

ペットとして大量に流通しており、子供たちに大人気です。野生化すると在来のクワガタムシなどに影響を与えるおそれがあります。

原産地

熱帯地方を中心に、世界各地に分布している。

形態と生態

クワガタムシの仲間は一般にもよく知られており、大型で雄の大あごが大きなことから子どもに人気がある。森林帯に生息し、成虫は夜間に樹液に集まるほか、灯火にも飛んでくる。

移入経路と現状

外国産クワガタムシ類は近年ペット昆虫として大量に輸入され、市場に流通している。飼育個体が逃げ出したり、飼えなくなった個体が野外に放たれたりして、野外での確認例が多数知られている。

影響

特に、外国産のヒラタクワガタやオオクワガタの仲間は、日本在来のヒラタクワガタやオオクワガタと雑種を作ることができるため、野生化すると日本在来のクワガタムシに遺伝的な悪影響を与えるおそれがある。

また、外国産のクワガタムシによって日本産の種が追いやられ、減ってしまう可能性もある。

そのほか、飼育下のクワガタムシには病原ダニの発生も確認されているため、移入種が持ち込む病原菌や寄生虫が、在来種に致命的な影響をおよぼす可能性もある。

コウチュウ目クワガタムシ科

学名：Lucanidae

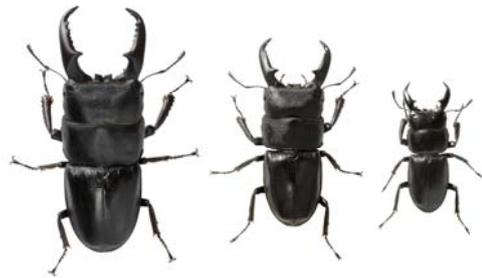


昆虫類

選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本 ファースト 100	世界 ファースト 100
-------------	-------------	------------	--------------------	--------------------

県内の確認状況



ヒラタクワガタ（在来種）



識別ポイント：種が多く、難しい。
大あごの歯の形が違うことがある。



スラウェシ
オオヒラタクワガタ



スマトラ
オオヒラタクワガタ

移入種：ヒラタクワガタの亜種

(このページの写真提供：中西一仁氏)

■ 類似種との識別点

ヒラタクワガタやオオクワガタの仲間は、野外で在来種との区別が難しい。雄は大あごの形や大きさで区別ができる場合もあるが、雌を識別することは、専門家でないとい難しい。

<ヒラタクワガタ>

種としては分布がとても広く、日本、インドネシア、ボルネオ島、フィリピン、マレー半島、タイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、インド、中国、台湾、朝鮮半島などに、多数の亜種が生息する。ペットショップで「オオヒラタクワガタ」という名前がついて販売されている種は、すべて県内のヒラタクワガタと交雑する可能性がある。

<オオクワガタ>

ヒラタクワガタに比べると分布は狭いが、種としては、国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。また、国外では朝鮮半島、中国、タイ、インドに分布し、多数の亜種が生息する。同一種内では交雑して雑種化が広まる可能性が高いので、注意が必要である。

■ 対策

外国産のクワガタムシは日本で越冬できないと思われがちである。しかし、熱帯産でも標高の高いところで生息している種は越冬できる可能性があるほか、夏の間日本在来のクワガタムシとの間に雑種を作る可能性があるため、飼い主に対して野外に逃がさないように厳重に注意を促す必要がある。かわいそうだから外に逃がす、という考え方は厳禁である。逃がしても死んでしまうか、もし生き残れば生態系に悪影響を及ぼすことを認識し、死ぬまで責任を持って飼うことが必要である。



モセリオオゴンオニクワガタ

マレー半島に分布する。明らかに日本産種と形や色が異なる。



オオクワガタ（在来種）



ホーベオオクワガタ

中国に分布するオオクワガタの仲間。

移入種：オオクワガタの亜種

(このページの写真提供：中西一仁氏)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

タイワンタケクマバチ

竹に穴を開けて巣を作る大きなハチです。在来種のクマバチへの影響のほか、竹材の利用に影響を与えるおそれもあります。

原産地

中国、台湾。

形態と生態

在来種のクマバチ（キムネクマバチ）に比べて細い体形で、体長は2cmを超える。しばしば飛んだまま空中で停止するため、観察しやすい。フジ、クロガネモチ、クチナシなど、さまざまな花の花粉を利用する。竹に穴を開けて巣を作る。

移入経路と現状

2007年に、愛知県豊田市と岐阜県安八郡で初めて侵入が報告された。以後、急速に分布域を拡大している。

影響

在来種のクマバチと花の花粉や蜜をめぐる競合が起きる可能性がある。また、竹に営巣するため、農具として竹を利用する農業、建築業にも影響が予想される。

このほか、本種に付着して移入してきたダニが、在来ダニを遺伝的にかく乱する可能性も指摘されている。

類似種との識別点

在来種のクマバチの胸には黄色い毛が密生して、遠くからでもはっきりと黄色に見える（種名「キムネクマバチ」の由来）のに対して、タイワンタケクマバチの胸部の毛は目立たず、全身が黒っぽく見える。

対策

巣を作るのに古竹を好むことから、立枯れの竹を放置しない、手入れしていない竹林は伐採するなどの対策が考えられる。

目立つ虫なので、早期発見に向けた情報発信、啓発が必要である。

ハチ目ミツバチ科

学名：*Xylocopa tranquebarorum*



昆虫類

選定状況

条例 公表	特定 外来	要 注意	日本 ワースト 100	世界 ワースト 100

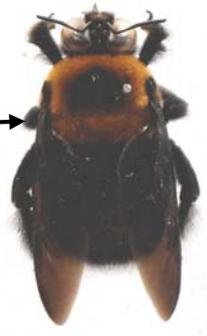
県内の確認状況



識別ポイント：
全身が黒っぽい



胸部が黄色い



参考：在来種のキムネクマバチ

(このページの写真提供：間野隆裕氏)

セアカゴケグモ

腹部が丸く、赤い斑紋があるのが特徴のクモです。側溝や隙間のあるところなどに生息します。咬まれると危険なので注意が必要です。

■ 原産地

オーストラリア。

■ 形態と生態

雌の成体は体長 7～10mm、色は黒色で、腹部背面に鮮やかな赤い斑紋がある。雄の成体は体長 4～5mm、体色は灰白色で、腹部背面に白い斑紋がある。毒があるのは雌のみで、雄は無毒。雌雄ともに攻撃性はない。

日当たりのよい側溝、石の隙間や配管の中などに好んで営巣する。温暖な地域に生息し、虫を食べる。繁殖期は夏で、10～200 個の卵が入った卵のうを 7～8 個産む。

■ 移入経路と現状

1995 年に、大阪府の埋立地で初めて確認された。貨物や建築資材などに付着して海外から持ち込まれた可能性が高い。現在では大阪府、三重県、兵庫県、和歌山県、奈良県、愛知県などに生息している。

■ 影響

現在のところ、県内では咬傷被害は報告されていない。自然生態系には侵入していないが、今後、海岸部などに侵入する可能性がある。

■ 類似種との識別点

ムナグロヒメグモ（雌）やアシフトヒメグモ（雌）など、在来種の中で腹部背面の斑紋が似た種がいるが、これらの種では腹面の斑紋がないことで識別できる。

■ 対策

個体や卵のうの除去、殺虫剤による駆除が実施されている。西南諸島の石垣島や西表島では薬剤散布により根絶した。不用意な接触防止や分布拡大防止について、多くの人に知らせてもらうことが重要である。

クモ目ヒメグモ科

学名：*Latrodectus hasselti*



クモ類

■ 選定状況

条例公表

特定外来

要注意

日本
ファースト
100

世界
ファースト
100

■ 県内の確認状況



識別ポイント：
腹部に赤い斑がある

（愛知県衛生研究所ホームページより）



（写真提供：緒方清人氏）

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

カワヒバリガイ

水道施設の配管などに群生して詰まらせることがあり、私たちの生活にも影響を与えることがある二枚貝です。

■ 原産地

中国、朝鮮半島。

■ 形態と生態

大きいもので4cm程度になる二枚貝。殻は細長く、薄い。殻の内側は、真珠のような光沢がある。

湖沼や大きな河川を中心に生息し、糸状の分泌物を出して護岸や石の間、係留用のロープや沈木などに付着する。浮遊幼生期があることが特徴で、この時期に浮遊して分散し、分布を拡大する。

■ 移入経路と現状

1980年代後半に、中国から輸入されたシジミ類に混入しているのが確認された。野外では1990年に揖斐川で初めて確認され、1992年には琵琶湖、木曽川や長良川でも侵入が確認された。愛知県では、木曽川のほか、矢作川や豊川水系でも分布が拡大している。

■ 影響

水道や発電など水を利用する施設に大発生すると、配管に詰まって水の通りを悪くしたり、大量死した際に水質を悪化させるなどの被害を引き起こす。また、寄生虫を媒介し、魚病被害を引き起こす可能性がある。

■ 類似種との識別点

同じく移入種のコウロエンカワヒバリガイと非常によく似ているが、本種のほうが細長い。また、カワヒバリガイは淡水域に生息するのにに対し、コウロエンカワヒバリガイは、汽水域から内湾に生息する。

イガイ目イガイ科

学名：*Limnoperna fortunei*



貝類

■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

カワヒバリガイ属の全種として指定されている。

■ 県内の確認状況



識別ポイント：
細長い殻



(写真提供：木村昭一氏)

■ 対策

大発生した場合は、利水施設の水を落として乾燥させ貝を死滅させたり、人手や重機でそぎ落とす対策が行われている。また、矢作川では、稚貝の発生量のモニタリングが行われている(3)移入種対策事例を参照。

スクミリンゴガイ

「ジャンボタニシ」とも呼ばれますが、タニシの仲間ではありません。卵は鮮やかなピンク色です。水稻などに被害を与えます。

■ 原産地

南アメリカ。

■ 形態と生態

大きいもので8cm程度になる淡水性の巻貝。殻は丸みが強く、褐色の帯模様がある。

水田や用水路、池などで見られる。流れの速い河川では生息できない。雑食性で、植物の新芽や稲の苗、動物の死骸や菌類も食べる。繁殖力は旺盛で、初夏から秋にかけて水際から50cmほどの高さの植物の茎や杭、コンクリート壁などにピンク色の卵塊を産みつける。卵は水中では生存できない。また低温に弱く、冬季は死滅することが多いが、土にもぐって冬眠するものもいる。

■ 移入経路と現状

1981年に台湾から長崎県と和歌山県に食用として導入され、1984年に有害動物に指定されるまで、全国各地で養殖されてきた。養殖場から逃げ出したほか、雑草防除のために放流されたこともあり、現在は関東以南に広く分布している。愛知県内では、木曽川水系、矢作川水系、豊川水系と周辺の水路や水田など、平野部を中心に広く生息している。

■ 影響

雑食性で食べる量が多いので、競合や捕食により、在来の巻貝を含む水生生物群集に影響を与える可能性がある。また、水稻やレンコンの食害など、農業被害が問題となっている。

■ 類似種との識別点

在来種のおオタニシに似ている。スクミリンゴガイはオオタニシよりも丸く膨らんだ形で、赤褐色の帯模様が見られる点で区別できる。

盤足目リンゴガイ科

学名：*Pomacea canaliculata*



貝類

■ 選定状況



■ 県内の確認状況



識別ポイント：
帯状の模様がある



ピンク色の卵塊

(このページの写真提供：木村昭一氏)

■ 対策

卵や個体の除去が行われているほか、水田では水位の管理による食害防止対策も行われている。

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

アメリカザリガニ

池や田んぼでよく見られるザリガニです。赤い体と大きなはさみで子供たちに人気があります。水草や水生昆虫などを食べてしまいます。

原産地
北アメリカ南部。

形態と生態
成体の体色は暗赤色だが、さまざまな色彩変異がある。はさみには赤色のイボが多数ある。

本州以南で最も普通に見られるザリガニで、湖沼や河川、ため池、水田、水路、公園の池などに生息する。水質汚濁にも強い。冬季は巣穴で冬眠する。雑食性で水草、水生昆虫などの小動物、小魚などのほか、動物の死骸も食べる。繁殖期は春で、雌は約 400 個の卵を産む。孵化後 1~2 年で体長 6cm になる。

移入経路と現状
日本へはウシガエルのエサとして、1927 年にニューオーリンズから約 20 匹が神奈川県に導入された。その後、食材やペット、生餌、教材などの利用で分布を拡大した。現在は本州から沖縄本島までの各地に定着し、愛知県内でも広い範囲で定着している。

影響
さまざまな小動物を捕食し、水生植物を切断して群落を壊滅させるなど、生態系に大きな影響を及ぼしている。特に希少な水草や水生昆虫への影響が懸念されている。

類似種との識別点
ザリガニの仲間としては、在来種であるニホンザリガニが東北地方より北に生息するほか、国内の数ヶ所では移入種でより大型のウチダザリガニが生息するが、県内にはアメリカザリガニしか生息していない。

対策
魚かご（かごワナ）による防除のほか、ザリガニ釣りの奨励が行われている事例もある。

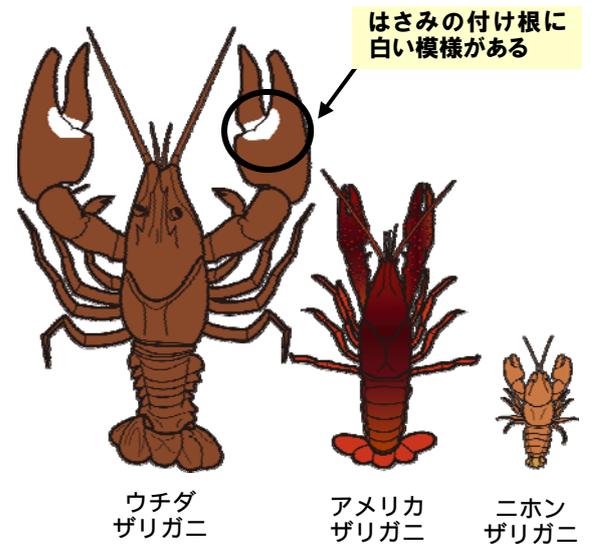
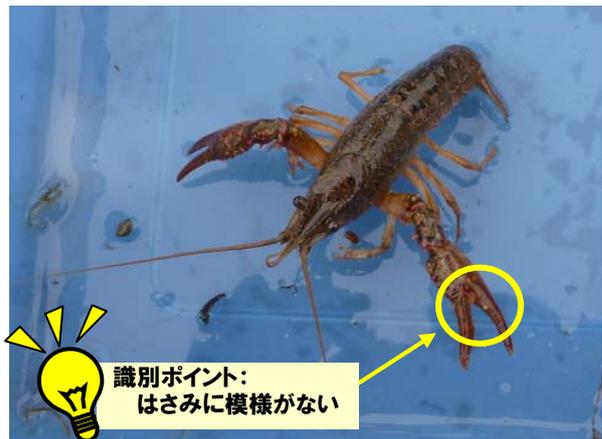
十脚目アメリカザリガニ科
学名：*Procambarus clarkii*



選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ファースト 100	世界ファースト 100
------	------	-----	-------------	-------------

県内の確認状況



アツバキミガヨラン

「ユッカ」という名で観葉植物として流通しています。海岸などに侵入して在来の植物の生育を妨げています。

■ 原産地

北アメリカ南部。

■ 形態と生態

ユリ科の常緑性低木。幹は高さ1~1.5mになる。長さ60~75cmの葉が幹の上部にまとまってつく。葉の色は濃緑色から灰緑色に変わり、硬く、先端が鋭くとがる。

8~11月に、長い茎に多数の白い花をつける。花は鐘のような形で、やや下向きに咲く。

■ 移入経路と現状

「ユッカ」の名で、観葉植物として流通している。日本には花粉を運ぶ昆虫がいないので、自然環境下では結実しないと言われている。株や地下茎が海流によって流され、分布が拡がると考えられている。県内では、主に海岸の砂浜などで見られる。

■ 影響

海岸の砂浜に侵入し、大きな株となるため、在来の海浜植物の生育を妨げている。葉は硬く先が鋭くとがっており、触るとけがをするおそれがある。

■ 類似種との識別点

近縁の園芸植物であるキミガヨランとは、葉先が垂れ下がらないこと、花に紫のすじが入らないことで区別できる。

■ 対策

植物の断片からでも増えるため、重機による掘り起こしなどにより不用意に駆除を行うと、かえって個体数が増加するおそれがあり、注意が必要である。

ユリ目リュウゼツラン科

学名: *Yucca gloriosa*



■ 選定状況

条例
公表

特定
外来

要
注意

日本
ワースト
100

世界
ワースト
100

■ 県内の確認状況



識別ポイント:
葉は硬く、先端はとがる



(写真提供: 瀧崎吉伸氏)



近縁の園芸種: キミガヨラン

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

アレチウリ

他の植物を覆い尽くして、勢いよく育ちます。アレチウリが生育すると、下の植物は日光を遮られ枯れてしまいます。

■ 原産地

北アメリカ。

■ 形態と生態

つる性の1年草。葉は手のひら状の五角形。茎はつる状で長く伸び、10mを超えることもある。果実のトゲは特に鋭くなっている。

河原や畑の周辺など、主に栄養が豊富で日当たりの良い場所に生育する。長いつるを伸ばして広がり、一面を覆うように成長する。

■ 移入経路と現状

国内では1952年に静岡県で初めて確認され、その後、全国的に分布を拡大している。愛知県内では、主に平野部で広く生育している。

■ 影響

長いつるで広い範囲を覆うため、他の植物の生育場所を奪うほか、樹木に直接からみつき、枯らすこともある。畑に侵入し、農作物に被害を与えることもある。

■ 類似種との識別点

本種と同じように大きな葉をつけるつる植物にはクズがある。本種の葉は五角形であるが、クズは1枚の葉が3つに分かれていること、本種は巻きひげで絡みつくが、クズは巻きひげを持たないことで区別できる。

■ 対策

愛知県内では、逢妻女川の河川敷で防除実験が行われている。(3 移入種対策事例を参照。) 手による抜き取り、機械による刈り取り、除草剤による駆除などが行われているが、種子が土の中で何年も生き続けるため、根絶には継続した駆除活動が必要である。

果実の細いトゲが、人体や衣服に刺さるため、駆除を行う際には注意が必要である。

ウリ目ウリ科

学名: *Sicyos angulatus*



■ 選定状況



■ 県内の確認状況



河川敷で繁茂している様子

(写真提供: 大川智史氏)

ウチワサボテン属

もともとは砂漠に生育する植物ですが、海岸などに侵入しています。植物体の一部から簡単に増えてしまいます。

■ 原産地

南北アメリカ。

■ 形態と生態

多年生で高さ 2m 程度になる。枝分かれが多く、うちわ形の葉のように見える部分が茎で、トゲが葉にあたる。トゲは長さ 1~4cm。300 種近くが知られていて変異に富む。

繁殖力が強く、茎の断片からでも増える。もともとは砂漠の植物で、高温と乾燥に強く、海岸の砂浜や荒れ地に適応して生育する。

■ 移入経路と現状

日本では古くから栽培されている。種子は河川など水の流れて移動するほか、鳥や動物にも運ばれ、何年も生存する。愛知県内では、渥美半島の表浜海岸などに点在しているほか、名古屋市内の線路敷地内にも生育している。

■ 影響

海浜に侵入したものは、急速に成長し藪を作るため、在来植物を駆逐する。また、鋭いトゲがあり、野生動物の障害となるほか、人体を傷つけることもある。

■ 類似種との識別点

在来の植物で、ウチワサボテンの仲間似たものはない。

■ 対策

三重県の松名瀬海岸では、一斉除去により根絶に成功した例がある(3 移入種対策事例を参照)。除草剤を使用する場合は、果実が成長する前に茎に注入するのが最も有効とされる。海外の例では、昆虫などの天敵を用いた防除も一定の効果を上げている。掘り起こした植物体から簡単に再生するため、廃棄には注意が必要である。

ナデシコ目サボテン科

学名: *Opuntia* spp.



■ 選定状況

条例公表	特定外来	要※注意	日本ワースト 100	世界※ワースト 100
-------------	-------------	-------------	------------	-------------

ウチワサボテン属の 1 種センニンサボテン (*Opuntia stricta*) が要注意外来生物、世界の侵略的外来種ワースト 100 に選定されている。

■ 県内の確認状況



識別ポイント:
うちわ形の茎



哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

オオカナダモ

最も広く流通している観賞用水草のひとつで、「アナカリス」とも呼ばれます。植物体の断片から再生し、分布を広げます。

原産地
アルゼンチン。

形態と生態
常緑で多年生の沈水植物。茎の長さは 1m 以上。葉の長さは 1.5～3cm で、細かい葉の縁のギザギザ（鋸歯）があり、茎の一つの節に 3～5 枚の葉が輪を描くように並ぶ。7～10 月に、水面上に花びらが 3 枚の白い花をつける。

淡水性で、湖沼、河川、池、水路などの日当たりの良い浅い水域に生育する。植物体の断片から、盛んに繁殖する。

移入経路と現状
日本では実験植物として導入されたのが最初とされ、1970 年代に琵琶湖で大繁殖して問題となった。現在、最も流通している観賞用水草のひとつであり、理科の授業で光合成の実験材料としても利用されている。愛知県内でも広い範囲に定着している。

影響
各地の池沼に侵入し、クロモなどの在来の水生植物との競合、駆逐が懸念されている。

類似種との識別点
在来種のクロモの葉は、一つの節に並ぶ葉が 3～8 枚で、鋸歯はオオカナダモよりはっきり見える。オオカナダモはクロモ、移入種のコカナダモに比べ葉が大きく、密についている。

対策
愛知県内では、矢作川で防除事例がある（[3](#) 移入種対策事例を参照）。琵琶湖では機械を使った大規模な除去が、京都市では人力による実験的な駆除が、それぞれ行われているが、植物体の断片から繁殖するため、継続的な対策が必要である。

トチカガミ目トチカガミ科
学名：*Egeria densa*



選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト 100	世界ワースト 100
------	------	-----	------------	------------

県内の確認状況



葉は大きく密についている
ギザギザが細かい

オオカナダモ



識別ポイント：
葉の付き方、形



ギザギザがはっきりしている

クロモ（在来種）



葉は小さく数が少ない

コカナダモ（移入種）

オオキンケイギク

オレンジ色の美しい花をつけますが、繁殖力が強く、河原などで他の植物の生育場所を奪います。和名は「大金鶏菊」がもとになっています。

■ 原産地

北アメリカ。

■ 形態と生態

茎の高さは 40～80cm に達する多年生草本。葉は茎の下の方に集まっており、粗い毛がある。花期は5～8月でオレンジ色の花をつける。

河川敷や海岸、道端などに生育し、刈り取りに対する再生力が強く、繁殖力が旺盛で強健な植物とされる。

■ 移入経路と現状

日本へは 1880 年代に観賞用や緑化用に導入された。八重咲きの品種などもつくられ、鉢植えや花壇に利用されたほか、厳しい環境にもよく耐えることから、道路の法面緑化などに盛んに使用された。現在では、野生化したものが全国各地に分布する。

一面に花が咲きそろうと美しく、特定外来生物に指定される前は「オオキンケイギク祭り」が行われていた地域もある。

■ 影響

大きな群落をつくることもあり、在来の植物との競合、駆逐が懸念されている。

■ 類似種との識別点

類似種のハルシャギクも観賞用として日本に持ち込まれている。ハルシャギクは花びらの付け根が紫褐色で、葉や茎に毛が生えていない点で識別できる。

■ 対策

生育の拡大を防ぐために、抜き取りや種子ができる前の刈り取りによる駆除が行われている。種子が土の中で何年も生き残るため、継続的な対策が必要である。

キク目キク科

学名：*Coreopsis lanceolata*



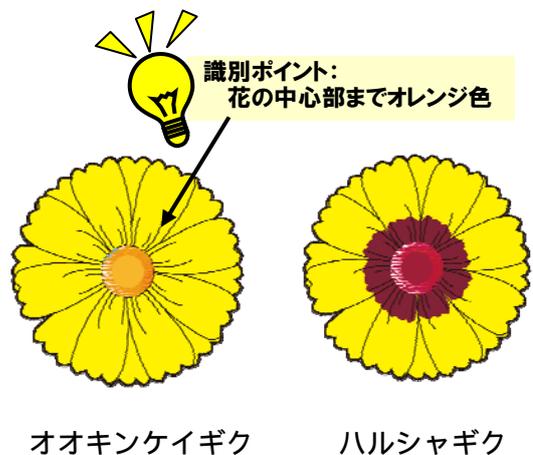
■ 選定状況



■ 県内の確認状況



(写真提供：大川智史氏)



オオキンケイギク

ハルシャギク

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

キショウブ

黄色の花が咲くアヤメの仲間です。ビオトープなどに植栽されていますが、野生化したものが水辺で繁殖し問題となっています。

■ 原産地

ヨーロッパ。

■ 形態と生態

水辺に生育する多年生草本。茎の高さは 50～120cm。葉は濃い緑色で細長い。5～6月に鮮やかな黄色い花をつける。

栽培すれば水辺以外でも育つが、野生化したものは常に水がある場所で生育する。地下茎で繁殖するだけでなく、種子が水に浮いて散布される。

■ 移入経路と現状

明治中頃に観賞用として導入され、その後、野生化した。鮮やかな黄色い花が親しまれ、ビオトープや水質浄化のために全国各地の水辺で栽培された。現在は、北海道から九州にかけての広い地域で野生化している。ため池の岸や河川敷の湿地、水路などに多い。

■ 影響

水辺の在来種と競合し、駆逐するおそれがある。また、キショウブの近縁に絶滅危惧種が数種あり、交雑による遺伝的かく乱のおそれも指摘されている。

■ 類似種との識別点

在来種のアヤメの仲間はすべて紫色の花を咲かせ、黄色の花をつけるものはない。「愛知県の花」であるカキツバタとは、葉の中心の太いすじの有無でも見分けることができる。

■ 対策

海外では、まばらに生えている場合は、植物体の掘り起こしと根茎の除去が行われている。小さな根の断片からでも繁殖するため、根絶には手間と時間がかかる。ビオトープなどへの植栽についても、注意が必要である。

ユリ目アヤメ科

学名：*Iris pseudoacorus*



■ 選定状況



■ 県内の確認状況



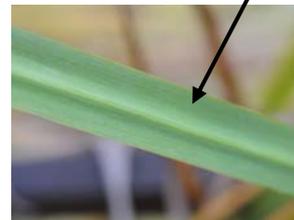
識別ポイント：
鮮やかな黄色い花



(写真提供：大川智史氏)



識別ポイント：
葉の中心に太いすじがある



キショウブ



カキツバタ

スイレン属 (ヒツジグサを除く)

水に浮かび、美しい花を咲かせますが、繁殖力が極めて強く、一度定着してしまうと手がつけられなくなります。

■ 原産地

熱帯から亜熱帯にかけて約 40 種が分布している。

■ 形態と生態

多年生の浮葉植物。水位が安定している池などに生育し、地下茎から長い茎を伸ばし、水面に葉や花を浮かべる。

温帯産スイレンは水面のすぐ上に花をつけるが、熱帯産は水面から高く突き出た茎の先端に花をつける。

■ 移入経路と現状

交配によって多数の園芸種が存在する。観賞用として植栽されたり、熱帯魚水槽に植栽されたものが捨てられて、池などに密生した群落を作る。愛知県内では、人里近くのため池などで見られる。

■ 影響

増殖すると、葉が重なり合うほどに大きな群落を作って水面を覆うため、在来の水草をはじめ、水生生物に大きな影響を与える。

■ 類似種との識別点

ハスと混同されるが、ハスは水面から高い位置に花柄がのび、葉に撥水性があることで識別できる。ヒツジグサは、山間部の小さなため池や湿原中の池に生育することが多く、平野部の池では見ることは少ない。

■ 対策

愛知県内では、名古屋市内のため池で名古屋ため池生物多様性保全協議会により駆除が行われている(3 移入種対策事例を参照)。きれいだからという理由で植栽されているが、対策としては植えないことが最も重要である。

スイレン目スイレン科

学名: *Nymphaea* spp.



■ 選定状況

条例
公表

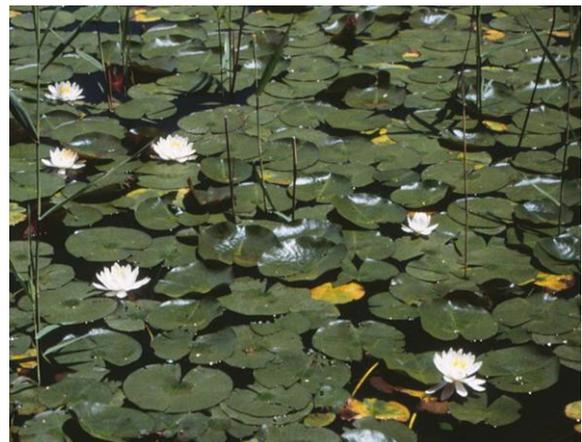
特定
外来

要
注意

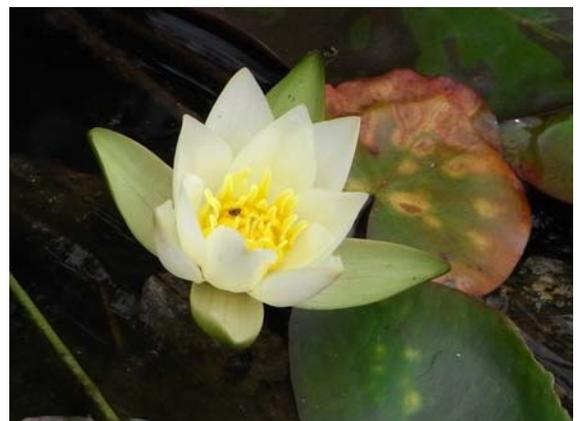
日本
ワースト
100

世界
ワースト
100

■ 県内の確認状況



(写真提供: 浜島繁隆氏)



在来種 ヒツジグサ

(写真提供: 愛知県緑化センター)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

タカネマツムシソウ

高山に分布するマツムシソウの仲間、紫色の美しい花を咲かせます。在来種のマツムシソウと雑種を作るため、問題となっています。

■ 原産地

日本の固有種で、本州と四国の高山に分布する。

■ 形態と生態

多年生草本で、風が強い高山の尾根など、やや乾いた草地や砂礫地に生育する。草丈は低く20～30cmほどである。花期は8～9月で、茎の先に直径5cmほどの紫色の美しい花を1つつける。また、ときに淡紅色や白色の花もみられる。

■ 移入経路と現状

愛知県には本来生育していなかったが、持ち込まれたものが面ノ木峠（豊田市・設楽町）や暮盤石山（設楽町）に生育している。面ノ木峠ではマツムシソウより早く開花する。

■ 影響

在来種のマツムシソウ（「レッドデータブックあいち 2009」では準絶滅危惧）との交雑が懸念されている。面ノ木峠ではマツムシソウを圧倒する勢いであるだけでなく、マツムシソウとの中間的な形態を持つ植物も確認されており、交雑によって遺伝的かく乱を引き起こしていると思われる。

■ 類似種との識別点

愛知県に自生するマツムシソウによく似ており、本種のほうが全体にやや草丈が低く花が大きい。花期に正確に識別するのは難しい。最も見分けやすいのは春のロゼット葉（右写真）で、マツムシソウに比べて切れ込みがはるかに深い。

■ 対策

面ノ木峠では手作業による抜き取りを実施している。

マツムシソウ目マツムシソウ科

学名：*Scabiosa japonica*

■ 選定状況

条例 公表	特定 外来	要 注意	日本 ワースト 100	世界 ワースト 100

■ 県内の確認状況



（左）タカネマツムシソウ（右）マツムシソウ

茎に毛があり
葉はほぼ無毛

葉に毛があり
茎は無毛

トウネズミモチ

大気汚染に強く、公園緑化樹や街路樹などによく利用されています。種子が鳥により散布され、各地に分布を拡大しています。

■ 原産地

中国。

■ 形態と生態

常緑の低木～高木で樹皮は灰色。葉は長さ7～11cmほどである。

6月頃、枝先に多数の白い円錐型の花をつける。花の蜜が多くの昆虫を引きつけ、アリ類や小型ハチ類など、さまざまな昆虫によって授粉される。黒紫色の果実は、ヒヨドリやシジュウカラ、メジロなどの鳥類により食べられ、散布される。

■ 移入経路と現状

明治初期に中国から渡来し、1960年代からは都市公園や街路に植えられた。鳥により種子が拡がることから野生化し、里山などにも分布を拡大している。

■ 影響

他の樹木と競合するほか、群落が林床を覆って、他の植物の生育を阻害する。さらに、果実を食べる鳥類の餌資源のバランスを崩す。また、在来種のネズミモチとの交雑のおそれも指摘されている。

■ 類似種との識別点

ネズミモチに似ているが、葉や花序が全体的に大きい点、葉も大きく光に透かしてみると葉脈が明るく見える点で識別できる。果実はネズミモチよりずっと多くつき、果実が熟す頃には房全体が垂れ下がる。

■ 対策

鳥により種子が周辺に散布されるため、なるべく植栽に利用しないことが重要である。不要な場所に生育しているものは、伐採するのが望ましい。

シソ目モクセイ科

学名：*Ligustrum lucidum*



■ 選定状況

条例
公表

特定
外来

要
注意

日本
ワースト
100

世界
ワースト
100

■ 県内の確認状況



識別ポイント：
葉脈は透けて
明るく見える

トウネズミモチの葉



ネズミモチの葉

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ノハカタカラクサ

白い花を咲かせるツユクサの仲間の園芸植物です。野生化したものが林の中などで繁殖し、問題となっています。

■ 原産地

南アメリカ。

■ 形態と生態

常緑の多年草。ほぼ無毛。茎は地をはい、先端部は斜めに立つ。葉は長楕円形で、帯状の斑がある栽培種と、無斑で緑色のものがある。

花期は5~8月で、茎の頂部に数個の花からなる花序をつける。地表をはう茎による繁殖も可能でやや湿っている日陰や水辺に生え、群落を形成する。民家周辺にも見られる。

■ 移入経路と現状

昭和初期に観賞用に日本に持ち込まれたものが、その後野生化し、関東地方以南の各地で分布を拡大している。愛知県内では、暖地の林地などで見られる。

■ 影響

林床などの日陰に一面に生育するので、在来種と競合し、駆逐するおそれが高い。近年も分布を拡大中で、観賞用に栽培されていることから、さらに分布を拡大するおそれがある。

■ 類似種との識別点

オオトキワツユクサに似るが、本種は茎と葉の裏が紫紅色である。オオトキワツユクサは茎と葉は緑色で、葉が薄くて大きく、葉の縁の毛が目立つ。

■ 対策

栽培にあたっては、野外に拡がらないように注意する必要がある。駆除に有効な除草剤もあるが、使用する際は他の種への影響がないようにする。不用意に引き抜くと、残った茎などからすぐに元の状態に戻ってしまうため、除去には注意が必要である。

サトイモ目ツユクサ科

学名：*Tradescantia flumiensis*



■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
------	------	-----	-----------	-----------

■ 県内の確認状況



ミドリハカタカラクサとも呼ばれる無斑のもの
(写真提供：大川智史氏)



葉が博多帯のような模様の栽培種

ハゴロモモ

フサジュンサイ、カボンバの名で、熱帯魚店などで売られています。ため池などに侵入して、在来の水草などに影響を与えています。

■ 原産地

北アメリカ。

■ 形態と生態

多年生の沈水植物。茎の長さは60～120cmで、茎は水中で枝分かれする。水中の葉は糸状で、扇形に広がる。

7～10月に水面上に白い花を咲かせる。湖沼やため池、河川に生育し、大群落を形成する場合もある。

■ 移入経路と現状

1929年にアメリカから導入された。その後、観賞用の水草として販売したものが野生化したと考えられる。水草の中では一般的なものの一つで、金魚藻の一種として親しまれている。国内では、本州から九州に定着している。愛知県内では、平野部や丘陵地のため池や流れがゆるやかな水路で見られる。

■ 影響

繁殖力が強く、大きな群落を作るため、在来の水草に影響を与えている。

■ 類似種との識別点

在来種のキクモ、フサモと似ているが、葉や枝分かれの形が異なる。ハゴロモモの葉は幅広く、規則的に分枝して平面的に広がる。

■ 対策

刈り取りや抜き取りのほか、生育場所の水位を低下させて生育を抑えることが効果的である。海外では、機械による除去も行われている。

観賞用水草として広く流通しているので、水槽の水を川へ流さない、増殖したものを自然の中へ捨てないなどのマナーの徹底が必要である。

スイレン目スイレン科

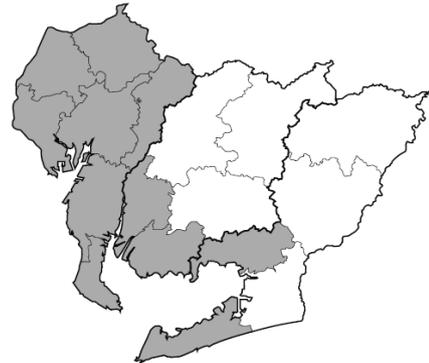
学名：*Cabomba caroliniana*



■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
-------------	------	------------	-----------	-----------

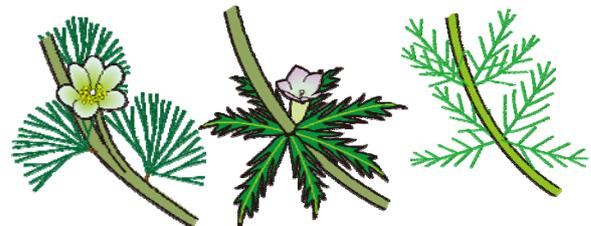
■ 県内の確認状況



(写真提供：浜島繁隆氏)



識別ポイント：
葉のつき方や形が違う



ハゴロモモ

キクモ

フサモ

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ハリエンジュ

成長が非常に速く、環境への適応力が高いマメ科の木です。「ニセアカシア」とも呼ばれます。河川敷などに侵入し、問題となっています。

■ 原産地

北アメリカ東南部。

■ 形態と生態

樹高は 20m 以上に達する落葉広葉樹。幹や枝には鋭いトゲがある。マメの形をした果実は長さ 5～10cm で、3～10 個の種子が入っている。5～6 月に白く芳香のある花を咲かせる。

空気中の窒素を固定する能力があるため、成長が早く、やせ地にも生育できる。河原、海岸、耕作放棄地、雑木林などでみられる。地中の種子の生存期間は長く、種子により盛んに繁殖する。また、親株から伸びた根から新しく芽を出して群落を作る。

■ 移入経路と現状

日本へは 1873 年に庭木、街路樹、砂防林、肥料木、蜜源植物、薪炭材として導入された。法面などの初期緑化木として使用され、現在は全国各地で定着している。

■ 影響

河川敷に侵入し、洪水時に川の流れを妨げるおそれがあるほか、田原市の海岸付近では絶滅危惧種のハギクソウ生育地に侵入している。

■ 類似種との識別点

同じマメ科のイヌエンジュやエンジュと果実や葉が似ているが、本種は花が白くて大きく、幹や枝にしばしば鋭いトゲがある。

■ 対策

全国各地で伐採・伐根、伐採後に土をかぶせる方法などが試験的に行われている。木を枯らす方法のひとつである「巻き枯らし」を行えば、芽が出にくいとされる。切り株からも発芽するため、切り株の薬剤処理なども行われている。

マメ目マメ科

学名：*Robinia pseudoacacia*



■ 選定状況



■ 県内の確認状況



(写真提供：大川智史氏)



識別ポイント：
鋭いトゲがある

ポンポンアザミ

最近になって、英名からポンポンアザミという和名がつけられました。桃色の可愛い花をつけますが、繁殖力が旺盛で厄介な植物です。

■ 原産地

南アメリカ。

■ 形態と生態

高さ 40～150cm になる多年生草本。長さ 6～8cm のノコギリ状の葉をつけ、7～11 月に、茎の先にピンク色の花を咲かせる。風により種子が散布される。繁殖力が強く、不安定な場所や、裸地、湿潤地などにも適応して生育することができる。

■ 移入経路と現状

日本では田原市（旧渥美町）で最初に確認され、その後、豊橋市でも確認されている。南アフリカでは、最も侵略的な外来植物の一つとなる可能性があるとして警戒されている。

■ 影響

繁殖力が強く、草地や湿地に侵入して、在来植物を駆逐するおそれがある。地下で広がって、アスファルトの隙間から出てくることもある。種子が風により散布され、分布を拡大するおそれがある。

■ 類似種との識別点

在来のアザミ類に似ているが、本種は葉にトゲがなく、茎や葉に毛が多い。また、在来のアザミ類は花が紫色のものが多いが、本種の花はピンク色である。

■ 対策

種子が風により散布されるため、安易な植栽は野外に分布を拡大させるおそれがある。地下深くまで根を張るので、1 回の作業で完全に除去するのは難しい。除草作業は継続して行う必要がある。

キク目キク科

学名: *Campuloclinium macrocephalum*



■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト100	世界ワースト100
-------------	------	-----	-----------	-----------

■ 県内の確認状況



(このページの写真提供: 瀧崎吉伸氏)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

ヒガタアシ

(スパルティナ・アルテルニフロラ)

干潟に生育し、強い繁殖力で干潟を草原へと変えてしまいます。移入種の中でも、最も侵略的で有害な種のひとつです。

■ 原産地

北アメリカ東部。

■ 形態と生態

イネ科の多年草。地下茎を深く張り、高さは0.4～2.5mになる。9～10月に穂をつける。

河口部や干潟などに密生した群落を作る。1日の半分以上、海水に浸かるところでも生育するなど、塩分に強い。繁殖力も非常に強く、種子や地下茎の断片で繁殖し、群落は1年で1m以上拡大する。

■ 移入経路と現状

国内では愛知県で最初に確認された。2008年4月に豊橋市梅田川河口において採取されたものが、2011年4月にヒガタアシと同定された。このほか、半田市阿久比川河口でも生育が確認されている。国内では、他に熊本県(八代海、有明海)でも確認されている。海外では干潟を陸地化、草原化するために利用された事例もある。

■ 影響

干潟への侵入により、絶滅危惧種を含む在来の海浜植物の生育を妨げる。干潟を草原に変えてしまうので、ゴカイやアサリなどの生息場所やシギ・チドリなどの餌場が失われるおそれがある。さらに、干潟が無くなることで水質浄化能力が低下し、漁業への影響のおそれがある。

近縁種のスパルティナ・アングリカは特定外来生物に指定されているが、本種もそれと同等以上の影響力があると考えられている。

イネ目イネ科

学名：*Spartina alterniflora*



■ 選定状況

条例
公表

特定
外来

要
注意

日本
ワースト
100

世界
ワースト
100

■ 県内の確認状況



駆除したヒガタアシ

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

■ 類似種との識別点

河口部や干潟などの、満潮時に海水をかぶるような場所で、ヨシよりも海側に丸いパッチ状の群落を作る。これまで何も生えていなかった河口部などに急速に群落ができたら、本種の侵入を疑うほうがよい。

ヨシは冬に枯れて茶色くなるが、本種は緑色を保っている。ヨシは葉の幅がササのように広いが、本種はススキのように細い。

■ 対策

愛知県内では、本種が確認された2か所において、地上部の刈り取りを実施している。直径5m以上になってしまった群落は抜き取ることが困難であるため、群落が小規模な初期段階で駆除することが重要である。

海外では薬剤を直接葉に塗りこむ方法が取られている。除去方法として、個体の引き抜きや刈り取りが行われているが、人力での駆除には限界もあり、地下茎の断片による拡散のおそれもあるため、今後適切な除去方法の検討が必要である。



識別ポイント：
穂はヨシのように細かく分岐しない



識別ポイント：
葉はヨシよりも細い



梅田川のヒガタアシ

(写真提供：瀧崎吉伸氏)



冬でも緑色
(2011.12.19 撮影)

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

植物

モウソウチク

タケノコとして、また竹材として利用されてきましたが、管理放棄されたものが里山で分布を拡大し、非常に問題となっています。

■ 原産地

中国。

■ 形態と生態

日本で見られる竹の中では最も大きく、茎は直径 8~20cm、高さ 20m 以上になる。葉の長さは 4~8cm と小さく、枝に密集してつく。春に黄葉して新しい葉に入れ替わる。

地下茎を張りめぐらせ、タケノコを出すことで分布を拡大する。茎は 1 か月で 20m ほど伸びる。数十年に一度開花し、花が咲くと寿命で枯れるともいわれる。

■ 移入経路と現状

日本では 1736 年に中国から鹿児島（薩摩藩）に導入された。農家周辺や耕作地などに植栽され、北海道から南西諸島まで広く分布する。近年、タケノコや竹材としての利用が少なくなったため、竹林の管理が放棄され、長い地下茎を伸ばして分布を拡大している。

■ 影響

成長が早く密生するため、モウソウチクが侵入した林では、他の樹木に日光が届かなくなり、その生育を妨げる。また、林床が暗くなり、分解しにくい落ち葉が厚く堆積することから、他の植物も育ちにくくなる。

竹林は管理されなくなると、密になって荒れると同時に、周囲の放置されている里山や休耕田などにも広がっていく。竹林の拡大は、現在の日本の里山で最も深刻な課題の一つとなっている。

イネ目イネ科

学名：*Phyllostachys heterocycla*



■ 選定状況

条例公表	特定外来	要注意	日本ワースト 100	世界ワースト 100
-------------	------	-----	------------	------------

■ 県内の確認状況



(このページの写真提供：芹沢俊介氏)

■ 類似種との識別点

モウソウチクの各節の輪は1つで、マダケ、ハチクは2つである。幹の太さは、モウソウチク、マダケ、ハチクの順に太い。モウソウチクとハチクは茎の表面が粉がふいたように白くなるが、マダケは緑色でつやがある。

モウソウチクのタケノコは皮の表面がざらざらで黒褐色なのに対し、マダケのタケノコは表面がなめらかで黒褐色の斑点があり、ハチクのタケノコは表面がざらざらで肌色である。

■ 対策

県の自然環境保全地域である岡崎市茅原沢（ちはらざわ）では、平成22年から県と地元住民、企業の協働によりモウソウチクの伐採活動を行っている（[3](#)移入種対策事例を参照）。市民参加による伐採では、作業時の林床の踏み荒らしに注意する必要がある。

地下茎に栄養を蓄えるため、伐採は継続的に行う必要がある。地下茎の広がり、根元の周りに深さ約1mの仕切板を埋め込むことで対処できる。タケノコは食用になるため、タケノコを採取するのも有効な駆除方法のひとつであるが、一度採取してもまた生えてくるので、繰り返し採取するとよい。



モウソウチク マダケ ハチク

マダケは葉が大きい



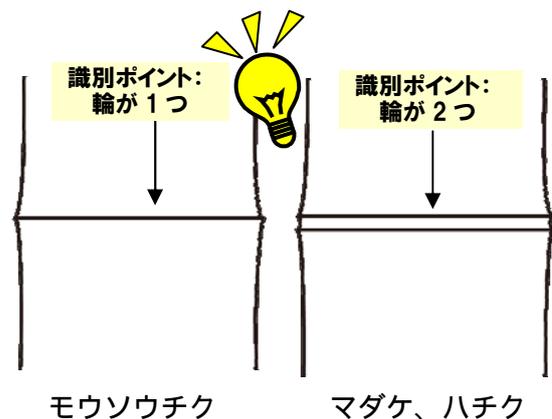
モウソウチク



マダケ



ハチク



（このページの写真提供：大川智史氏）